

tough 構文の名詞化および動名詞化

齊 藤 美 紀

1. 序 論

to 不定詞を含む構文の名詞化は、必ずしも、いつも可能なわけではないことが(1)からわかる。

- (1) a. *John's appearance to be sick
 (cf. John appears to be sick)
 b. John's eagerness to please
 (cf. John is eager to please)
 c. *John's easiness to please
 (cf. John is easy to please)
 d. John's being easy to please¹

(1 a)は繰り上げ (raising) の構文の名詞化であり、(1 b)は形容詞が to 不定詞をとる構文の名詞化、(1 c-d)はそれぞれ、tough 構文の名詞化、動名詞化である。これらの名詞句は、一見類似しているにもかかわらず、その文法性は異なる。(1 a-b)の文法性については、さほど問題なく説明され得ると思われる。例えば、(1 a)のS構造は、具体的には、(2)のように示され、Rizzi (1990)に従えば、(3)に基づいて説明される。

(2) John's_i appearance [_{CP} t_i to be sick]

(3) a. ECP : A nonpronominal empty category must be properly head-governed.

(ここで、proper-head-government とは、head の直接投射内での統率を意味する。) (Rizzi (1990 : 87))

- b. XP is a barrier if it is not directly selected by an X^0 nondistinct from [+V]. (ibid : 108)

つまり、(3 b)のもとでは、(2)において、CP が障壁となり、その結果、John の痕跡 t_i は (3 a) の ECP を満たすことができず、このため (1 a) は非文法的であるといえる。これに対し、(1 b) の S 構造は、具体的には、(4) のように示され、ここには、ECP 違反を引き起こすような痕跡は存在しておらず、よって、(1 b) のような名詞化を妨げるものはなにもないのである。

(4) John's eagerness [_{CP} PRO to please]

では、(1 c-d) についてはどのように説明されるのであろうか。Chomsky (1972) や Kayne (1984) は、特に (1 c) について、ある説明を試みている。しかし、Chomsky (1986a) にみられる空演算子の移動を含む tough 構文の分析のもとでは、彼らの説明はもはや有益ではなく、そのような分析のもとで、(1 c) と (1 d) の文法性の違いがどのように導きだされるのかは、全く明らかではない。従って、本稿では、tough 構文の名詞化および動名詞化に関して、特に空演算子に着目することにより、適切な説明を与えることを試みる。2 節では、以上に挙げた二つの先行分析に簡単に触れ、それらは妥当ではなく、従って、tough 構文の名詞化に関して、なにか別の説明が必要であることを示す。3 節では、第一に、空演算子の移動について考察し、空演算子に課せられる条件を提案する。そして、その条件に基づいて、(1 c) と (1 d) の異なった文法性が導かれることを示す。4 節は結論である。

2. tough 構文の分析の変遷

本節では、tough 構文の分析の移り変りに焦点をあてながら、tough 構文の名詞化に関する Chomsky (1972) および Kayne (1984) の説明を簡単に概観する。そして、Chomsky (1986a) による空演算子の移動を含む tough 構文の分析のもとでは、その名詞化に関して、新たな説明を要することを示す。

2.1. tough 移動変形

tough 構文の初期の分析においては、tough 移動という、この構文に特異な変形規則が存在していた。この tough 移動を用いた分析のもとでは、(5 a)の tough 構文は、(5 b)で補文の目的語位置にある John が主節の主語位置へ繰り上がることにより派生される。さらに、(5 b)については、外置により(5 c)から派生される。よって、(5 c)が基底の構造ということになる。

- (5) a. John is easy to please.
- b. It is easy to please John.
- c. To please John is easy.

Chomsky (1972) は、このような tough 構文の派生と(6 a)の tough 構文の名詞化は相容れないものであると説明している。

- (6) a. *John's easiness to please
- b. John's being easy to please

基底構造(5 c)を考慮すれば、形容詞 easy の語彙記載項には、「easy は目的語位置に節をとる。」という情報は含まれていないことになる。easy から派生された名詞 easiness についても同様である。従って、派生名詞 easiness は目的語位置に節を伴うような環境には語彙挿入され得ないことになり、このため、(6 a)のような名詞句は排除されることになる。² これに対し、(6 b)にみられるような動名詞化は一種の変形であり、この変形は(5 a)のような派生構造にも適用可能であることから、(6 b)が派生されることになる。以上が、tough 構文の名詞化および動名詞化に関する Chomsky (1972) による説明である。

2.2. wh 移動を含む tough 構文の分析

Chomsky (1977) は、(5 a)のような tough 構文に含まれる補文は、wh 島の効果をもつことを示している。³ このことから、Chomsky (1977) は、(5 a)は、(7)に示されるように、wh 移動を含む構文であるとする分析を導いている。

- (7) John is easy (for us) [_S [who_i for] PRO to please t_i]

(Chomsky (1977 : 103))

この分析によれば、(7)における John は、もはや、tough 移動によって主節の

主語位置へ移動したのではなく、最初からその位置に生成されることになる。また、Chomsky は、(7)においてCOMPへ移動した who は、義務的に削除されるとしている。このような wh 移動を含む tough 構文の分析に基づいて、Kayne (1984) は、(6 a)の非文法性に関して、Chomsky (1972) とは異なった説明を与えている。Kayne は、COMP 内の wh 要素が削除されると、その位置には空範疇が残されると仮定している。よって、(6 a)は、具体的には、(8)のように示される。

(8) a. John's easiness [_S who to please t]

↓ deletion

b. John's easiness [_S e to please t]

Kayneによると、(8 b)におけるCOMP内の空範疇はECPを満たさなければならない。しかし、名詞はS'境界を越えてその内部の要素を統率することはできないので、この空範疇は主要部統率されない。従って、COMP内に残された空範疇がECP違反を引き起こすために、(6 a)の名詞句は非文法的であるということになる。⁴ 以上が、Kayne (1984)によるtough構文の名詞化に対する説明である。⁵

2.3. 空演算子の移動を含む tough 構文の分析

Chomsky (1986a)に従えば、tough 構文は、(7)のように顕示的な wh 句の移動を含むのではなく、(9)のように空演算子の移動を含むものとして分析される。そして、2.2.節での分析と同様に、(9)における John は、主節の主語位置に基底生成されることになる。

(9) John is easy [_{CP} Op_i to please t_i]

Chomsky (1986a : 85)によると、変項は演算子に束縛されることを要求されるだけでなく、(10)の意味で、強束縛 (strong binding) されなければならない。

(10) 変項の値域 (range) が演算子によって決定されるか、あるいは、変項の値 (value) がその変項を束縛する先行詞によって決定されるかのいずれかでなければならない。

(9)において、変項 t_iは空演算子 Op_iにより束縛されているが、この Op_iは空

(empty)であるから、変項 t_i の値域を指定することはできない。従って、(10)によれば、(9)の t_i は、先行詞 John によってその値を与えられなければならないというふうになる。以上の分析は、tough 構文における補文 CP が wh 島の効果を示すことを可能にするという点でも支持できるものである。よって、この分析は tough 構文に対する妥当な分析として受け入れられる。しかし、このような分析のもとで、tough 構文の名詞化および動名詞化はどのように説明されるのであろうか。この分析に基づけば、(6 a)の名詞句は(11)のS構造を持つことになる。

(11) John's easiness [_{CP} Op_i to please t_i]

(9)は tough 移動変形によって派生されるわけではないので、(11)に対して、2.1.節で示された Chomsky (1972) の説明はもはや不可能である。また、(11)における空演算子は非顕示的な要素であるから、削除される必要はない。つまり、(11)において CP の指定辞に空範疇が存在することはあり得ない。よって、2.2.節で示された Kayne (1984) の説明を利用することもできない。だからといって、(9)に示されたような空演算子の移動を含む tough 構文の分析を覆すことも困難であろう。従って、(11)のように示される(6 a)の名詞句を排除するものはなにもないように思われる。

以上のことから、空演算子の移動を含む tough 構文の分析のもとでは、その名詞化は、(11)のように表され、このままでは、(6 a)は文法的であると間違っ予測されてしまうであろう。よって、次節では、このような分析のもとで、tough 構文の名詞化がどのように排除され、また、その動名詞化がどのように可能となるのかについて、考察を進めることにする。

3. 空演算子に課せられる条件と tough 構文の名詞化および動名詞化

(1)で示された名詞句((12)として繰り返す)は、表面的には類似しているが、実際には、それぞれ異なった特徴を持つ。

(12) a. *John's_i appearance [t_i to be sick]

b. John's eagerness [PRO to please]

c. *John's easiness [Op_i to please t_i]

d. John's being easy [Op_i to please t_i]

(12 a)と(12 b)の文法性の違いについては、1節ですでに触れた。(12 c)は(12 a)のようなECP違反を引き起こすような痕跡を含んでいないので、(12 c)は(12 a)と同様の理由で排除されることはできない。では、次に、文法的な(12 b)と非文法的な(12 c)を比べてみよう。両者の明らかな違いは、(12 c)は(12 b)とは異なり、空演算子 Op_i の移動を含んでいるという点である。つまり、空演算子の有無が両者の文法性の差異に関与していると考えられる。従って、この節では、まず、空演算子に課せられるある条件を提案し、その条件に基づいて、tough構文の名詞化および動名詞化の文法性の違いを説明することを試みる。すなわち、(12 c)はその条件を満たすことができず、よって、非文法的となるが、(12 d)はその条件を満たすことができ、ゆえに、文法的であると主張する。

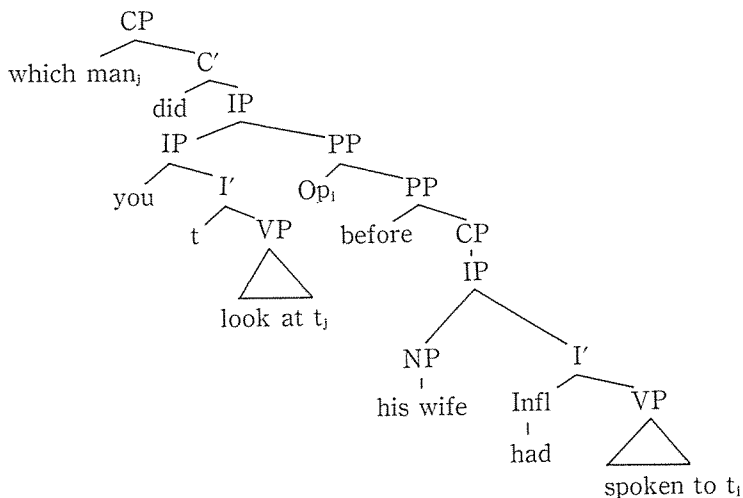
3.1. 空演算子に課せられる条件

空演算子の移動は、tough構文以外に、寄生的空所の構文にも見られる。⁶

(13) Which man_j did you look at t_j [Op_i [before [his_i wife had spoken to t_i]]]⁷ (Lasnik & Stowell (1991 : 699))

ここで、寄生的空所の構文に目を向けてみることにする。(13)の寄生的空所の構文は、Lasnik & Stowellに従って、具体的には、(14)のような樹形図で表される。

(14)



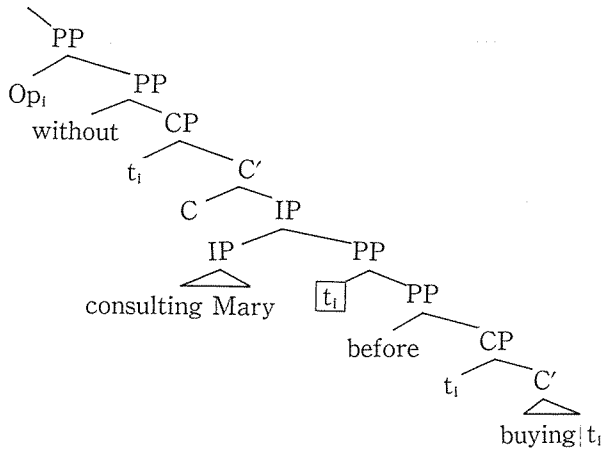
(L & S (1991 : 694))

Lasnik & Stowellによれば、(14)で、空演算子 Op_i は t_i の位置から移動し、付加詞の位置付けをもつ PP に付加する。これをふまえて、次に、(15)のように、寄生的空所を含む付加詞 PP がさらに別の付加詞 PP に埋め込まれている事例を考察してみよう。

(15) *Which book_i did you read t_i [PP without consulting Mary [PP before buying e_i]] (Browning (1987 : 153))

(15)は、(16)に見られるような空演算子の移動を含むと考えられる。

(16)



(16)で問題となるのは、 t_i であろう。つまり、 t_i は主要部統率され得ず、これが(3 a)のECPに違反することから、(15)は非文法的であるといえる。⁸ (17)から分かるように、もし、寄生的空所を含む付加詞 PP が別の付加詞 PP に埋め込まれていなければ、空演算子の移動に際して、何ら問題は生ぜず、寄生的空所の構文は文法的である。(17 b)は(17 a)の関連した部分の構造である。)

(17) a. Which man_i did you look at t_i [after Mary had spoken to e_i]
(L & S (1991 : 692))

b. ... [PP Op_i [PP after [CP t_i [IP Mary had spoken to t_i]]]]

ここで(16)の移動について、再度考察してみよう。つまり、(18)のように、もし、Op_iが下位の PP に付加するのみで、それ以上移動しないとしたらどうであろうか。

(18) Which book. . . [PP without consulting Mary [PP Op_i [PP before [CP t_i [VP buying t_i]]]]]

(18)における Op_iの移動は、(17 b)の場合と同様、合法的な移動であり、この場合、(15)は文法的であると誤って予測されてしまうだろう。従って、Op_iは義務的に上位の付加詞 PP まで移動されなければならないといえる。これについて、Chomsky (1986b) は、(19)に示される連鎖合成 (chain composition) に基づいた説明を与えている。

- (19) If $\delta = (\alpha_1, \dots, \alpha_n)$ is the chain of the real gap and $\delta' = (\beta_1, \dots, \beta_m)$ is the chain of the parasitic gap, then the “composed chain” $(\delta, \delta') = (\alpha_1, \dots, \alpha_n, \beta_1, \dots, \beta_m)$ is the chain associated with the parasitic gap construction and yields its interpretation.

(Chomsky (1986b : 56))

Chomskyによれば、(19)のように形成された連鎖 (δ, δ') において、 δ' の先頭要素((19)における β_1)は、 δ の終端の要素((19)における α_n)に対して0下接でなければならない。つまり、寄生的空所の構文では、移動した空演算子と真の空所(real gap)の間に障壁があってはならないことになる。以上のことから、(15)に対して、(18)ではなく、(16)におけるOpの移動が強制される。

空演算子の移動を含むが、(19)のような連鎖合成が不可能な事例に対しても、(18)ではなく(16)と同様の移動が要求されると思われる。例えば、空演算子の移動を含むと考えられている(20)の補文目的語削除構文(complement object deletion (COD) constructions)を考察してみよう。

- (20) *John is too rich for us to go away [without asking for money after helping *e*]. (Cinque (1990 : 110))

(cf. The article was too long for us to read *e*)

もし(20)が(21 a)のような移動を含むのであるならば、その場合、ECP違反を生ずることなく、(20)は事実に反して文法的になってしまう。よって、(20)の事例に対して、(21 b)のような空演算子の移動が強制され、(16)の寄生的空所の構文の場合と同様、 \bar{t}_i がECP違反を起こすために、(20)は非文法的であると説明されるべきであろう。

- (21) a. . . . [PP without asking for money [PP Op_i [PP after helping t_i]]]
 b. . . . Op_i . . . [PP without [CP t_i [IP asking for money] [PP \bar{t}_i] [PP after [CP t_i [VP helping t_i]]]]]]]]

しかし、(20)においては、(19)で示されているような真の空所の連鎖は存在しない。よって、(20)に対し、Chomsky(1986a)の連鎖合成に伴う0下接の説明を使うことはできない。従って、寄生的空所の構文とCOD構文を包括するような、すべての空演算子の移動に課せられる条件が必要であると思われる。以上

でも述べたように、Chomsky (1986a) によると、空演算子は値域 (range) を指定しないので、(10)のもとで、その空演算子の移動によって生じた変項は、値 (value) を与えてくれる先行詞と関連づけられなければならない。よって、ここでは、次のように考える。空演算子移動によって生じた変項が値を得るために先行詞と関連づけられるときには、その変項の位置から移動した空演算子と先行詞との間が遠く隔たっているとはならないとする。従って、空演算子に課せられる条件(22)を提案する。⁹

- (22) 空演算子の移動により生じた変項に値を与える先行詞とその空演算子の間に障壁 (barrier) があってはならない。ただし、先行詞が二つ以上の構成員からなる連鎖である場合は、その構成員のうちの一つの構成員と空演算子の間に障壁があってはならない。(便宜上、後者のような先行詞を、以後、連鎖先行詞と呼ぶ。)

障壁の定義は(3 b) ((23)として繰り返す)に従う。

- (23) XP is a barrier if it is not directly selected by an X^0 nondistinct from [+V].

よって、(22)に基づけば、(15)に対して、(18)にみられるような空演算子の移動は許されない。なぜなら空演算子 Op_i と連鎖先行詞の構成員である which manの間には、障壁となる付加詞 PP が存在しているからである。つまり、(22)によって(16)にみられるような移動が強制されるのである。しかしながら、その場合には ECP 違反が生じ、このため、(15)は非文法的になることはすでに示した。これに対し、(13)については、その樹形図(14)からもわかるように、空演算子 Op_i と連鎖先行詞の構成員である which manの間には、障壁は存在せず、(22)を満たしているので問題ない。¹⁰ 同様に、(22)の条件は、(20)に対して(21 a)ではなく(21 b)の移動を強制する。しかし、(21 b)では、(16)の場合のように、 \bar{t}_i が(3 a)の ECP 違反を引き起こすと考えられ、よって、(20)は非文法的となるといえる。¹¹

この節では、空演算子の移動により生じる変項が値を得る際には、空演算子が(22)の条件を満たさなければならないと主張した。実際、(22)の条件のもとで、空演算子を含むいくつかの事例が適切に説明されることも示した。従って、

(22)は空演算子に課せられる妥当な条件であるといえよう。次節では、この条件に基づいて、tough構文の名詞化および動名詞化の事例について考察する。

3.2. tough構文の名詞化および動名詞化

tough構文(24)は、(22)の条件を満たしているのであろうか。

(24) John is easy [_{CP} Op_i to please t_i]

(24)の具体的な構造は(25)のようになるであろう。

(25) [_{IP} John [_{VP} is [_{AP} easy [_{CP} Op_i to please t_i]]]]

Cinque (1990)によれば、CやIは[+V]と非弁別的(nondistict)である。つまり、(25)のVP、AP、CPは、それぞれ、[+V]と非弁別的なI、V、Aにより選択されているので、(23)のもとで、それらは障壁ではない。すなわち、(24)において、(22)の条件は満たされている。

では、tough構文をもとにした名詞句(26 a)および動名詞句(26 b)についてはどうであろうか。

(26) a. *John's easiness [Op_i to please t_i]

b. John's being easy [Op_i to please t_i]

ここで注目すべき点は、Grimshaw (1990)の分析に基づいた際の、(26 a-b)におけるJohn'sの位置付けである。Grimshawは、名詞句内に現われるすべての所有格名詞は項ではなく、付加詞であると主張している。彼女によれば、名詞化(nominalization)は語基(base)である述語の外項の抑制を要求する。例えば、(A) The enemy destroyed the city. の派生名詞句は、(B) the enemy's destruction of the cityとなるが、この名詞化の際、述語destroyの外項は抑制されることになる。このため、(A)でthe enemyは外項の位置付けをもつが、(B)の派生名詞句内にある所有格名詞John'sはもはや外項としての位置付けをもたず、付加詞としてみなされることになる。以上の要領で、すべての所有格名詞は付加詞として位置付けられる。また、述語が外項をもたない場合は、述語の外項の抑制が不可能となり、よって、外項の抑制を要求する名詞化は起こり得ないとGrimshawは述べている。¹² 実際、depressやamuse等の心理使役動詞は外項を持たず、これをもとにした(27)の名詞句は非文法的である。

(27) a. *The movie's amusement of the children

(Grimshaw (1990 : 119))

b. *The drug's depression of the patients (ibid : 120)

以上の Grimshaw の主張に従えば、(26 a) の名詞句内にある所有格名詞 John's は項ではなく、付加詞であるといえる。しかし、(26 b) の動名詞句における John's の位置付けは付加詞ではなく、項であると思われる。Grimshaw (1990 : 77-78) によれば、-ing 名詞類が節を伴って現われる場合、それは動詞的動名詞（または、所有格動名詞ともいう）である。従って、(26 b) は動詞的動名詞であるといえる。ここで、(28) の事実注目すべきである。

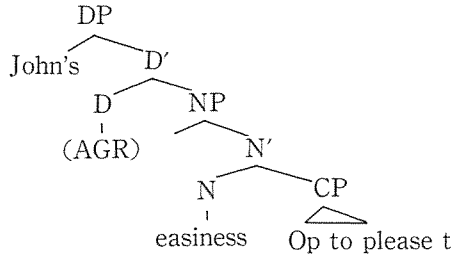
(28) a. [The movie's depressing the boys] is most regrettable.

b. [The movie's amusing the children] interfered with their study.

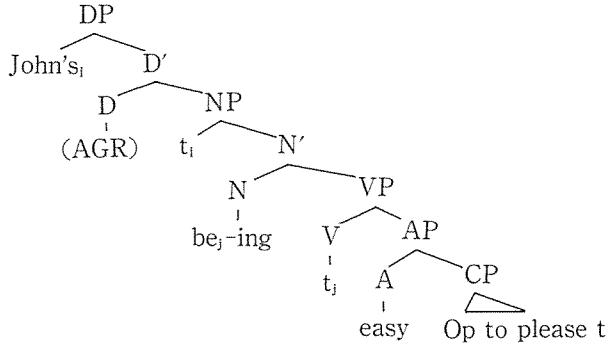
外項を持たない心理使役動詞 depress と amuse をもとにした動詞的動名詞 (28) は、述語の外項の抑制を要求する (27) の名詞化の事例とは異なり文法的である。このことから、動詞的動名詞の形成においては、動詞の外項の抑制は要求されないといえる。従って、動詞的動名詞句における所有格名詞、すなわち、(26 b) の John's は、抑制されることのない述語 (easy) の外項に対応し、つまりは、項としての位置付けをもつといえる。こうして、(26 a) と (26 b) の John's の位置付けは異なり、前者が付加詞の位置付けを持つのに対し、後者は項の位置付けをもつことがわかるであろう。

以上の項構造の分析に基づくと、(26 a-b) は、それぞれ幾分異なった構造をもつと思われる。Horn (1975)、Shachter (1976) 等によれば、動詞的動名詞は節ではなく名詞句と同じ分布を示す。よって、名詞句は DP であると主張する Abney (1987)、Stowell (1989) に従えば、動詞的動名詞の位置付けは DP となる。つまり、(26 a-b) とともに DP の位置付けを持つことになる。Stowell (1989) よると、SpecNP は項位置であり、SpecDP は付加詞位置である。よって、(26 a) の付加詞 John は SpecDP の位置に、そして (26 b) の項 John は SpecNP の位置に基底生成されることになる。以上のことから、(26 a-b) の S 構造は、それぞれ、(29 a-b) として表される。(ただし、(29 b) の動詞的動名詞句については、Horn (1975) の分析を考慮して、その内部に VP を含むとする。)

(29) a.



b.



ここで重要なのは、(29 a-b)において、(22)の空演算子に課される条件が満たされているかどうかである。(29 a)においては、変項の値を決めるべく先行詞 John's と Op の間には、障壁となる NP、CP が存在している。従って、条件(22)を満たしていないことになる。これに対し、(29 b)では、条件(22)を満たしていると思われる。(29 b)で VP は障壁ではない。というのも、N である be_j-ing は、動詞 be の移動により派生された要素であるから、V の特性を保持していると考えられ、これに直接に選択された XP (つまり、ここでは、VP) は、(23)のもとで障壁ではないといえる。¹³ 同様に、(23)によれば、(29 b)における AP、CP も障壁とはならない。よって、(29 b)では、連鎖先行詞の構成員である t_i と空演算子 Op の間に障壁は存在せず、(22)は満たされている。¹⁴

以上のことから、次のように結論付けられる。つまり、(12 c)のような tough 構文の名詞化が非文法的となるのは、(29 a)のその構造から分かるように、空演算子に課せられる条件(22)を満たしていないからである。一方、(12 d)のような tough 構文の動名詞化が文法的であるのは、(29 b)に示されるように、条件(22)を満たしているからである。

4. 結論

本稿では、Chomsky (1986a) 等による空演算子の移動を含む tough 構文の分析のもとで、tough 構文の名詞化および動名詞化がどのように説明されるのかを考察した。その際、空演算子に課せられる条件を提案し、それに基づけば、(1 c)と(1 d)の文法性の違いが導かれることを示した。いまや、(1)の to 不定詞を含む名詞句は、それぞれ表面上は類似しているにもかかわらず、なぜ異なった文法性を示すのかは、明らかである。

注

- 1 動詞的動名詞（所有格動名詞）は名詞句の位置付けを持つものとする。
- 2 この議論は、名詞句には変形規則がかからないという主張のもとで成り立つ。
- 3 さらに、Cinque (1990) においても示されているように、(7)のような構文において、please のあとに残された痕跡は寄生的空所を認可することから、この痕跡は変項であり、この構文には wh 移動が関わるといえるであろう。

(i) This book_i is too interesting [to put e_i down [without having finished e_i]]
(Cinque (1990 : 99))
- 4 Kayne (1984) における ECP は、(3 a)の ECP とは幾分異なるが、ここでは、後者を念頭においても、何ら支障はないと思われる。
- 5 Kayne (1984) は(1 d)のような tough 構文の動名詞化については触れていないが、(i)で、形容詞 easy が、COMP 内の痕跡を統率でき、この場合は ECP 違反が起こらないといえるだろう。

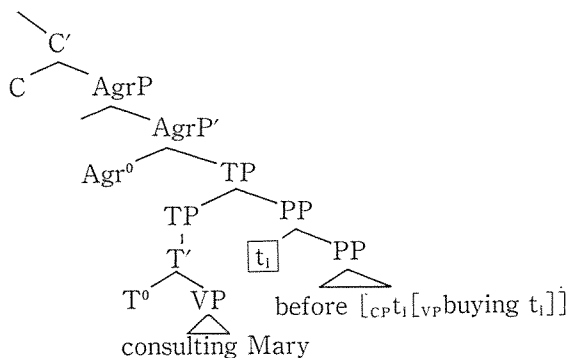
(i) John's being [_{AP} easy [_{s'} t to please t]]
- 6 (i)のような関係節については、Tellier (1991) や Contreras (1993) に従って、顕示的な wh 語の移動を含み、それが削除 (delete) されることにより、派生されるところとする。

(i) [_{NP} the man [_{CP} I saw]]

よって、以下で論じられる議論は関係節には関与しない。
- 7 (13)は、L & S (1991) が呼ぶところの weakest crossover の事例であるが、この事例を用いても、ここでの議論に影響はない。

- 8 (16)の $\boxed{t_i}$ が、実際、どのようにして ECP 違反を起こすのかは、全く明らかなわけではない。Rizzi (1990 : 50) の樹形図に従えば、(16)の関連した部分の構造は (i) のようになると思われる。

(i)



(i)において、 $\boxed{t_i}$ は主要部統率はされていない。(Agr⁰は、それと一致するものに対してのみ、主要部統率子となる。) よって、(i)のもとで、 $\boxed{t_i}$ は ECP 違反を引き起こすといえる。また、(16)で $\boxed{t_i}$ 以外の痕跡は(3 a)の ECP を満たすことができる。Cinque(1990)によると、英語の前置詞の範疇素性の値は指定されておらず、従って、英語の前置詞は [+V] と非弁別的である。つまり、(16)で、without の補部 CP と before の補部 CP は(3 b)に従って、障壁ではないといえる。よってそれぞれの CP の Spec に存在する痕跡 t_i は前置詞によって主要部統率される。

9 (22)の条件は LF で適用するとする。

10 この場合、Op_iの移動によって生じた変項 t_i は which man により強束縛され、(10)を満たしていることになる。

11 (20)の非文法性は、変項 e が John によって、A 束縛されており、束縛条件 C の違反のためであるとはいえない。Lasnik & Stowell (1991) によれば、(i)に従って、このような A 束縛は許されるからである。

(i) If an A-position X A-binds a category Y as a result of Predication (or control), then Condition C does not apply to A-binding of Y (or its chain) by X. (L & S (1991 : 714))

また、寄生的空所の構文で、(ii)のように、主語の移動を含む場合は(22)の条件を満たしているが、anti-c-command の条件に違反する(つまり、束縛条件 C に違反する)。このため、(ii)は不適格となるのであろう。anti-c-command の条件の必要性については、L & S (1991 : Section 4. 4.)を参照。

(ii) *Who_i t_i stayed with you [without your talking to e_i]

(L & S (1991 : 712))

12 ここでいう名詞化とは、Grimshaw が呼ぶところの、複合出来事名詞類 (complex event nominal) としての名詞化のことである。

13 これは、Chomsky (1986b)による次の議論に類似している。Chomsky は (i) で、V が I に移動し、V_iが形成されるとしている。

(i) [_r V_I [_{VP} t...]]

(Chomsky (1986b : 69))

I は VP を L-mark しないが、V_iは語彙的 (lexical) であり、(i)で VP を L-mark するので、これは障壁とならない。

14 (29 b)で、John's の SpecNP から SpecDP への移動については、次のように仮定する。つまり、この移動によって、SpecDP の John's と D が一致をおこし (spec-head agreement)、この時、D が SpecNP にある痕跡に対する主要部統率子となる。そして、この格 (属格) を得るための移動が関与する場合には、NP は障壁ではないとする。

参考文献

- Abney, S. P. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Browning, M. (1987) *Null Operator Construcions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, N. (1972) *Studies on Semantics in Generative Grammar*, Mouston, The Hague.
- Chomsky, N. (1977) "On Wh-Movement," in P. Culicover, T. Wasow, & A. Akmajian, eds., *Formal Syntax*, Academic Press, New York, 71-132.
- Chomsky, N. (1986a) *Knowledge of Language : Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, N. (1986b) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Cinque, G. (1990) *Types of A' Dependencies*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Contreras, H. (1993) "On Null Operator Structures," *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 1-30.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Massa-

chusetts.

- Horn, G. M. (1975) "On the Nonsentential Nature of the POSS-ING Construction," *Linguistic Analysis* 1, 333-388.
- Kayne, R. (1984) *Connectedness and Binary Branching*, Foris, Dordrecht.
- Lasnik, H. and T. Stowell (1991) "Weakest Crossover," *Linguistic Inquiry* 22, 687-720.
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Schachter, P. (1976) "A Nontransformational Account of Gerundive Nominals in English," *Linguistic Inquiry* 7, 205-241.
- Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.
- Stowell, T. (1989) "Subjects, Specifiers, and X-Bar Theory," in M. R. Baltin and A. K. Kroch, eds., *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, The University of Chicago Press, Chicago : 232-262.
- Tellier, C. (1991) *Linguistic Theory and French Parasitic Gaps*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Synopsis

The Nominalization and Gerundive Nominalization of *tough*-constructions

By Miki Saito

The purpose of this paper is to make clear why the nominalization of *tough*-constructions is impossible as in (1 a), whereas the gerundive nominalization of *tough*-constructions is possible as in (1 b).

(1) a. *John's easiness to please

b. John's being easiness to please

As for this problem, some explanations have given. Thus, Chomsky (1972) deals with the problem under the analysis of *tough*-constructions based on *tough*-movement. Kayne (1984) also explains the ill-formedness of the nominalization of *tough*-constructions, but under the analysis proposed by Chomsky (1977) where the derivation of *tough*-constructions includes the movement of an overt *wh*-word

and the deletion of the moved *wh*-word. Under the analysis of *tough*-constructions in Chomsky (1986a), however, the above two accounts are no more available. According to Chomsky's (1986a) analysis, as in (2), the derivation of *tough*-constructions includes the movement of O, which is an empty operator, and in the analysis *tough*-movement and the movement of an overt *wh*-word are never concerned with the derivation.

(2) John is easy [O [to please e]]

As the analysis including the movement of O can be considered as adequate in some respects, another explanation based on the analysis must be offered to the ill-formedness of (1 a) and the well-formedness of (1 b). In this paper, first, focusing on the movement of O as in (2), I propose a condition imposed on an empty operator. This condition can also be applied to other cases including the movement of an empty operator, that is, parasitic gap constructions etc. Next, based on Grimshaw's (1990) argument structure theory, I show that the noun phrase (1 a) and the gerund (1 b) have the different structures. Then, I conclude that in the structure given to (1 a), the empty operator included in (1 a) cannot meet the above condition and the nominalization of *tough*-constructions is taken as ill-formed, whereas in the structure given to (1 b), the empty operator included in (1 b) can meet the condition and therefore the gerundive nominalization of *tough*-constructions is well-formed.